

令和5年度
舞台芸術等総合支援事業
(共同制作支援)
成果報告書

事業（公演）名	ヨハン・シュトラウスⅡ世作曲 喜歌劇『こうもり』 全3幕
代表団体名	公益財団法人びわ湖芸術文化財団
劇場・音楽堂等の 名称	滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 東京芸術劇場 山形県総合文化芸術館（やまぎん県民ホール）
実演芸術団体等の 名称	日本センチュリー交響楽団 山形交響楽団
内定額	36,779 (千円)

1. 事業概要

(1) 事業の概要

趣旨・目的、ニーズ等	
<p>・びわ湖ホール、東京芸術劇場、やまぎん県民ホールと各地のオーケストラによる本共同制作では、互いがこれまでに培ってきた制作力をフルに活用し、ヨハン・シュトラウスⅡ世作曲、喜歌劇の最高傑作とされる『こうもり』を祝祭感あふれる華やかな形で上演しました。</p> <p>・指揮にヨーロッパで四半世紀にわたり歌劇場の要職を経験し、日本国内でも山形交響楽団常任指揮者、びわ湖ホール芸術監督(2023年4月就任)を務める阪 哲朗を迎え、日本人には難しいとされる主にワルツで構成される作品を、指揮者のDNAレベルにまで浸透した音楽の感性で、粋で華やかな演奏を実現しました。</p> <p>・演出に狂言和泉流の狂言師であり俳優・演出家としても活躍する野村萬斎を迎え、舞台美術、衣裳、照明プランには、オペラ・演劇の両分野で活躍し野村萬斎からも信頼の厚い日本を代表するプランナーを配しています。オペラ初演出となる野村萬斎の新しい視点とベテラン舞台スタッフが協働し、西洋のオペラと日本の様式美の両面を際立たせる圧倒的で見ごたえのある作品を新制作することができました。</p> <p>・キャストには、国内ではこれ以上望みようのない第一級の日本人歌手を、ベテラン、中堅、若手とバランスよく配置しました。1か所ではなく複数箇所上演する共同制作が持つメリットを生かした配役により、圧倒的なレベルの上演を目指しました。</p> <p>・今回、共同制作公演として、大津・東京・山形で上演することは、日本から世界に向けて創造発信することとなり、日本の舞台芸術界の発展と日本と地域の芸術振興に寄与でき、支援をいただくことにより、レベルの高い公演を少しでも低廉な価格で提供することが可能となり、全国における舞台芸術鑑賞者の裾野をさらに広げることとなったと考えます。</p> <p>・〈劇場でオペラを観る〉という舞台芸術の素晴らしさに触れる経験は、観客に出演者、音楽、舞台との深い感動の共有に加えて、舞台芸術を通して世界の文化を知り、感性を高め、豊かな心を育む効果をもたらします。出演者(歌手、合唱、オーケストラ)にとっても、公演回数の増大は、経験値を増し、それぞれの能力を高め活躍の機会を広げます。また、複数の劇場・団体と共同して公演を行うことによって優秀な演奏家・スタッフを相互に広く紹介でき、キャスト、スタッフの地域交流が行われ、制作能力の向上やノウハウの蓄積が可能となります。なお、それら劇場、芸術団体が協力し力を高め合い、単独では不可能な最高峰の舞台を創り上げることにより、日本全国に創造活動のネットワークが形成され、芸術公演の地域間格差の解消が期待されます。それは「劇場・音楽堂等の活性化に関する法律」ならびに「文化芸術基本法」の趣旨に合致するものと考えます。</p>	
実施日時・実施会場(所在地)・実施回数	
① 大津公演	2023年11月19日(日) 会場: 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 大ホール <1公演>
② 東京公演	2023年11月25日(土) 会場: 東京芸術劇場 コンサートホール <1公演>
③ 山形公演	2023年12月17日(日) 会場: やまぎん県民ホール 大ホール <1公演>
演目・曲目、幕構成、主な出演者、主なスタッフ、あらすじ等	

ヨハン・シュトラウスⅡ世作曲 喜歌劇『こうもり』全3幕

原語歌唱・日本語台詞（日本語・英語字幕付）

【あらすじ】

昔、仮装パーティーの帰り道に、こうもりの恰好に扮したファルケ博士は酔っ払い車中で寝てしまう。そんな友人を街の噴水の脇の目立つ場所に放置し人々の笑いものにした資産家のアイゼンシュタイン。以来ファルケは皆にこうもり博士と言われ嘲笑的の。いつかはと、復讐に燃えるこうもり博士は、莫大な遺産を持って余すオルロフスキー公爵が催す夜会や、アイゼンシュタインが公務員を侮辱した罪で収監される刑務所で、見事に愉快的復讐を果たします。

大晦日の晩の出来事が描かれる喜歌劇の最高傑作。ワルツ王ヨハン・シュトラウスⅡ世ならではの、愉快で華やかで魅惑的な音楽が全編に溢れています。

指揮：阪 哲朗（山形交響楽団常任指揮者／びわ湖ホール芸術監督）

演出：野村萬斎

美術：松井るみ / 衣裳：半田悦子 / 照明：杉本公亮

合唱指揮：辻 博之 / 舞台監督：酒井 健 / プロダクションマネージャー：關 秀哉

<キャスト>

アイゼンシュタイン：福井 敬、ロザリンデ：森谷真理（大津・東京公演）・田崎尚美（山形公演）、フランク：山下浩司、

オルロフスキー：藤木大地、アルフレード：与儀 巧、ファルケ博士：大西宇宙（大津・東京公演）・青山 貴（山形公演）、

アデーレ：幸田浩子、プリント博士：晴 雅彦、フロッシュ：桂 米團治、イーダ：佐藤寛子

助演：神保良介、森永友基

合唱：大津＝びわ湖ホール声楽アンサンブル、東京＝二期会合唱団、山形＝喜歌劇『こうもり』山形公演特別合唱団

管弦楽：日本センチュリー交響楽団（大津公演） / ザ・オペラ・バンド（東京公演） / 山形交響楽団（山形公演）

事業（公演）の特徴、鑑賞者利用者拡大のための工夫点又は戦略等

・キャストは、所属団体の垣根を越えて適材適所に配置しました。これにより出演者のバリエーションの幅が広がり、より祝祭感あふれる印象を与えることができ、集客の増加を期待することができます。

・看守のフロッシュ役に落語家として活躍し、クラシック音楽やオペラにも造詣の深い桂米團治を起用しました。山形でもオペラフェスティバルの司会をつとめるなど全国区で活躍し、親しみのある語り口で人気を博す落語家の出演で、これまでオペラに馴染みのなかった方を含め広く一般の方からも注目を集めました。

・アデーレの姉妹にあたるイーダ役は山形県出身の歌手を配役し、合唱は各地域の歌手を起用するなど各地域で舞台芸術活動への参加促進を狙いました。

・さらに各劇場では、オペラの裾野を広げるための入門講座や、プレレクチャー、演出家・指揮者によるスペシャルトークなどの関連企画を充実させ、初心者からオペラファンまで幅広い観客に対して、公演の理解を深め、興味を喚起させる取組を積極的に実施しました。

・聴覚障がい者向けに補聴機能となる磁気ループまたは、赤外線補聴システムを全参加館で稼働することでのバリアフリー化を図りました（各館設置済み）。また、小さなお子様をお持ちの方にも安心して公演を楽しんでいただけるよう、全館で託児サービスを実施しました。

・日本語字幕に加えて英語字幕を掲出することで多言語理解につなげ、外国人が鑑賞できる機会の創出に努めました。

共同制作を行う劇場・音楽堂等、実演芸術団体

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場、山形県総合文化芸術館 指定管理者 みんなるやまがた（やまぎん県民ホール）

共催者・協賛者・後援者・関係機関

①大津公演

後援：オーストリア大使館/オーストリア文化フォーラム東京

②東京公演

共同主催：東京都

後援：オーストリア大使館/オーストリア文化フォーラム東京

③山形公演

共同主催：山形新聞・山形放送

共催：山形県

後援：ミヤギテレビ、福島中央テレビ、オーストリア大使館、オーストリア文化フォーラム東京

(2) 事業の目標値、実績値

実施会場	実施日程	入場者・参加者数（人）	
		目標値	実績値
滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール	2023年11月19日	目標値	1,270
		実績値	1,649
東京芸術劇場	2023年11月25日	目標値	1,280
		実績値	1,608
やまぎん県民ホール	2023年12月17日	目標値	1,370
		実績値	1,619

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価	
共同制作の意図や役割分担など事業が適切に組み立てられていた（と認められる）か。	
【制作過程】	
2020年	東京芸術劇場とびわ湖ホールでオペレッタの実施を相談。
21年 8月	この年、びわ湖ホール参与に阪哲朗が就任。阪哲朗指揮で演目の調整。大体の公演日程決定。
21年 9月～	ほかの共同制作館（追加）の検討。
22年 5月	演出家は野村萬斎、演目は『こうもり』に決定。
22年 6月	やまぎん県民ホールの参加が決定。
22年 9月	第1回制作会議。主催者間で条件等擦り合わせ。
22年 10月	出演ソリスト、舞台装置・衣裳・照明各プランナー決定。
22年 12月	劇場下見。第1回プランナー会議実施。
23年 4月	演出家、出演者がwebにより顔合わせ。
23年 5月	制作発表記者会見@東京芸術劇場。チラシ・ポスターのデザイン、広報計画等打ち合わせ。
23年 7月	チケット発売
7月～11月	立ち稽古@東京
	以降、予定通り進行。
【役割分担】	
全体的なオペラ制作：びわ湖ホール／広報：東京芸術劇場／旅行関係：やまぎん県民ホール	
制作委託を入れることなく、稽古場運営ほか全てを3館協力して実施しました。細かな日程変更はあったものの、概ね予定通りに進めることができました。また、各地の広報媒体やSNSを駆使し、互いに効率的かつ積極的な広報ができたことで、3館ともチケットを完売することができました。	
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。	
【文化的意義】	
首都圏や大型都市での実施が多い本格的なオペラ公演を地方で開催できたことで、これまで鑑賞する機会が少なかった地域、隣県の人々が地元の劇場で気軽に鑑賞できる機会を得ることができました。また都市部の劇場においては、新たなプロダクションを新たなターゲットにアプローチする機会となり、今回の出会いをきっかけに舞台芸術鑑賞者の裾野を広げ、各地域ひいては国内の文化水準の向上に貢献しました。	
【社会的意義】	
ホールや劇場が各地域の人々の心の拠り所となり、コミュニティの中心となるべく、ライブならではの舞台芸術の素晴らしさを多くの方に伝えました。山形公演では、山形交響楽団と山形在住の大学生や東北で活躍する若手声楽家を中心に結成した特別合唱団が出演しました。県内の若い世代が舞台に立つ機会を創出できただけでなく、国内外で活躍するプロフェッショナルとともに完成度の高い公演を開催できたことで、地域の文化振興に資することができたと考えます。	
【経済的意義】	
3都市共同で広報を実施したことで、ホールの所在地や近隣だけでなく、全国的なホールの認知度向上につながったと考えます。他会場の評判が次の公演会場に波及していき、最後の公演地であるやまぎん県民ホール公演の来場者の中には他公演の評判を聞いてチケットを購入された方や北海道など遠方からの来場もあり、関西・関東・東北エリアを超えた人の流動に起因したと考えます。（山形公演の県外来場者はアンケート統計より29%）	
東京公演では、演目にちなみ「シャンパン」をフューチャーして全館を盛り上げる活動に繋げることが出来ました。	

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

①西洋のオペラと日本の様式美を融合させた、国内外にも広く発信できるレベルのオペラを新制作し、オペラファンや伝統芸能ファンにとどまらず、幅広い層からの支持が得られ、オペラがより一般に広く普及する公演を目指します。

→公演後のアンケートにて、「世相を反映したセリフや観客の笑いを誘う場面が多くあったのは日本におけるクラシック、特にオペラやオペレッタの在り方の展望を見たように思う」「オペレッタは初めて鑑賞したが、落語風の解説がわかりやすかった」など幅広い層から好評の感想を多くいただき、一定実現できたと考えます。

②合同での制作発表や公演制作のこまめな進捗状況の発信等により、多くの方から注目される話題性のある公演を目指します。新聞、雑誌、web等の掲載件数が（公演前後を併せて）、3館で45件以上を目標とします。

→全体として40件となりました。（未達成）

③若手歌手が共に学べる機会を創出し、今後のオペラ界を担う人材を育成するために、20代、30代の若手歌手をカヴァーキャストとして積極的に起用します。ダブルキャストの2役を除く6役で、若手歌手を5名以上起用します。

→カヴァーキャストとして30代前半の若手歌手1名を起用しました。（未達成）

④各館とも2024年度の事業で制作から関わるオペラ公演等を引き続き1本以上実施することを目標とします。

→2024年度のオペラ実施予定数 びわ湖ホール：4演目29公演、東京芸術劇場：1演目2公演、やまぎん県民ホール：1演目1公演（達成）

⑤聴覚障がい者向けの磁気ループまたは、赤外線補聴システムを各劇場で稼働させます。字幕についても多言語化を図り、日本語字幕に加えて英語字幕を全公演で掲出し外国人来場者の増加に努めます。

→実現しました。

⑥各館の入場者率を75%以上（大津1,270名、東京1,280名、山形1,370名）に設定します。

→全館完売となりました。（達成・入場者数 大津公演：1,649人、東京公演：1,608人、山形公演：1,619人）

指標②では、びわ湖ホール公演は早々に完売したため発売後の公演告知の掲載がほとんどなかったことから未達成となりましたが、SNSにて稽古時から山形公演にいたるまで積極的に発信することで、各館・各地域の文化力を広く発信でき、チケットが全館完売となるなど多くの方に注目された公演となりました。

指標③では、結果的に経費の都合からカヴァーキャストはアイゼンシュタイン役のみとしたため人数面では未達成でしたが、多くの稽古で歌い演じると共に、東京公演の本番時には合唱として出演してもらい、キャストから多くを学べる機会を創出しました。また、合唱には20～30代の若手声楽家で構成されるびわ湖ホール声楽アンサンブルや学生を起用するなど若手歌手に一流のキャストの歌・演技を間近で学べる機会を提供し、人材育成の観点からは一定目標を達成できたと考えます。また、山形公演の合唱は学生や社会人を中心とした編成としたため、やまぎん県民ホールは地元の指導者とこれまでも増して密に連携し、東京での稽古への地元指導者の参加、地元での合唱稽古の実施等、公演が円滑に進むようにアレンジしました。地元の指導者も東京での立ち稽古に積極的に参加し、山形公演の成功に大きく貢献しました。制作スタッフについても、立ち稽古には各館の担当者が複数名立ち合い、稽古場での打ち合わせに加わる、キャストやスタッフと直接関わりを持つ、各メディアの取材に立ち会う等、今後の自主制作につながる経験を積み、オペラ制作のノウハウの共有や能力向上につながりました。これを活かし、2024年度も各館1本以上のオペラ制作に取り組むことが決まっており、各地域、ひいては国内の舞台芸術振興に寄与できたと考えます。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

東京都、山形県、滋賀県と所在地が離れており、また指揮者、演出家、スタッフらは他の公演も抱え、特に演出家は他分野でも幅広く活躍して多忙を極めるなど1つの場所に集まることが困難な中であっても、情報共有の場を確保し、協働して制作に取り掛かれるよう、打ち合わせはウェブを駆使するなど工夫を重ねました。また、通常であれば、立ち稽古は連続した日程で行うところ、7月から間隔をあけての実施となるなどイレギュラーな稽古組みとなりました。そんな中でも、制作期間を長めに設定したことで、実際の歌手を前に演技を練り上げる時間が長期に確保できることとなり、限られた時間の中で極めて集中力の高い稽古を行うことができました。

概ね計画通り進めることができましたが、合唱の演技の一部で計画変更となりました。当初計画では合唱には動きがなく、各地の合唱の立ち稽古は組んでいませんでしたが、最終的に冒頭の序曲からアイデアに富んだ動きが続くこととなりました。そのため、びわ湖ホールでは本番週の当初の練習時間の中でこの動きについての稽古も行い、やまぎん県民ホールでは追加の立ち稽古を行うこととなりました。また、山形公演では一部キャストが変わるため、大津・東京公演の後に該当シーンの立ち稽古を追加しました。

各館では、仕込み・場当り、また指揮者より舞台仕込み後の舞台での歌手とオーケストラの練習についてさらなる日数追加の要望がありましたが、各館の使用状況および経費の都合上、叶いませんでした。舞台稽古の充実には日本のオペラ界の悲願ですが、どのプロダクションも活路が見いだせないのが現状です。そんな限られた時間の中でも、各館やスタッフ、出演者が持つノウハウ、経験を最大限活用し、高い話題性に応える質の高い舞台を制作することができました。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

申請後に各館の財務状況が変わったことから当初の計画に比して経費削減に努めましたが、事業費の積み上げは適切であったと考えます。大きな変更が生じた経費は以下の通りです。

・出演料

演出プランが具体的になり、アクティングエリアの関係から指揮者合意の上、合唱の人数が32名から20名程度に減り、びわ湖ホールと東京芸術劇場はプロの音楽家による合唱でしたが、やまぎん県民ホールは一般の方にも出演いただきました。また、ソリストの出演料も3公演をまとめたうえで交渉してご協力いただけたことにより、合計で約700万円の経費削減となりました。

・楽譜借料・制作料

オーケストラ楽譜は、想定していたものではなく指揮者指定の別の楽譜となり、3つのオーケストラが連携・協力して約130万円の経費削減につながりました。

・交通費・宿泊費

宿泊費の高騰が著しいため、立ち稽古の期間は地方にいるソリストの往復および宿泊数が少なくなるよう、各スタッフが協力して効率のいい稽古組みをし、約700万円減となりました。

・チラシ・プログラム等作成費

チラシのデザインおよびプログラムのデザイン・印刷をすべて3館共通としました。また、プログラムは3公演地のうち一番安い印刷会社に一括して印刷を依頼し、約100万円の経費の削減につながりました。

・舞台費

昨今の資材費の高騰から約165万円の経費増となりました。

(4) 創造性

自己評価

我が国の実演芸術水準を向上する牽引力となることが期待できる国際的水準の公演であった（と認められる）か。

今回のプロダクションは、所属に関わらず望みうる国内最高のキャストとスタッフを揃え、「初心者にも分かりやすく親しめる」ものを目指し、新制作しました。四半世紀以上、欧州でオペラ指揮者として活躍した阪哲朗が得意とするオペレッタ『こうもり』を指揮し、オペラ初演出の狂言師 野村萬齋が演出し、日本人キャストのみで構成された、まさに＜日本発の日本人による日本人のためのオペラ＞を制作することができました。

今回の野村萬齋のオペラ演出への起用は、日本の宝の創出であったと考えます。野村萬齋の演者として、また演出家としての、クラシック音楽を学んだ大学時代の経験がすべて昇華され、歌手、舞台に無理がなく、かつ、自由な発想の見たこともない傑作オペレッタができあがりしました。台本も野村萬齋自らが執筆し、歌唱はドイツ語、台詞は日本語であることから、野村萬齋自身が分かりやすく納得できる作品作りを心掛け、日本人が日本語で話して、不自然でなく、かつリアリティのあるシチュエーションを設定したと言います。舞台は明治の頃の日本、一幕を日本橋の質屋の茶の間、二幕を鹿鳴館での晩さん会、三幕を牢名主が皆の畳を独り占めする日本の刑務所という設定ではありますが、物語そのものは極端な読み替えはせず、『こうもり』の台本を深く読みこんだ傑作となりました。活動写真の弁士のような、物語を客観視して観客に語る役割を作り、それをフロッシュ役も務める落語家 桂米團治が務め、時には歌舞伎のツケ打ちも用いながら、幕開きから物語をけん引しました。また、野村萬齋が信頼を置く役者2名が助演として黒子、ウェイター、受刑者ほか何役も務めたほか、各地の合唱の畳や幕のフォーメーションのリーダーとして大活躍しました。舞台美術は能舞台を基調に、三本の橋掛りをつけ、畳、暖簾、ちゃぶ台、座布団、鰻重、金屏風、提灯のシャンデリア等が登場し、ソリストの衣裳は鳥を意識した美しい色のもの、オルロフスキー公爵役は公家さながらカウンターテナーが務め、合唱は礼装が描かれた書割の幕をもって鹿鳴館の客人となり、最終幕の刑務所は格子戸を使って牢屋を表現する等、決して質は落とさず、どちらかと言うと上品な体裁で、どこの劇場でも上演できるよう工夫を凝らしました。字幕は日本語、英語の両方を掲出しましたが、日本語字幕において、序曲ではこうもり等の絵を自由に飛ばすなど極めて自由な発想で、観客を一気に物語へと引き込みました。また随所に昭和から令和までのギャグ（と言われるもの）も盛り込み、幅広い世代が気軽に楽しめ、狂言のように末永く親しんで頂けるプロダクションが誕生しました。

自己評価

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながった（と認められる）か。

3公演地すべての完売をめざし、SNSでの積極的な広報に努めました。多くの方に注目いただき、各公演の際にも多くの感想が寄せられました。以下の公演評やSNSで高評価を得、各館に注目が集まり、劇場としての評価も上がったと考えます。

◆モーストリークラシック2月号（加藤浩子/音楽評論家） 抜粋

「野村萬齋は天才である。時代や場所を移し替えるのはオペラ（演劇でも）演出ではよくあることだが、それがこれほどびったりはまった例を筆者は知らない。」

「設定替えはいわゆる「読み替え」ではなく「置き換え」であり、「イタズラ」と「化かし合い」という《こうもり》の本質を、日本人が自然に演じるための「置き換え」である。台本も萬齋が担当し、歌はドイツ語だがセリフは日本語で、設定に応じて大胆な改変がされていたが、こちらもごく自然に受け取れるものだった。」

「口上とフロッシュには桂米團治を起用、お笑いの質が一ランク上がった。阪哲朗指揮するシュトラウスの音楽が、舞台以上に演劇的だったことも特筆したい。」

◆朝日新聞夕刊 11月30日（吉田純子） 抜粋

「狂言師の野村萬齋が、初めて挑んだオペレッタの演出で和洋の「笑い」の本質を鮮やかに連ねた。大津市のびわ湖ホール、池袋の東京芸術劇場、山形市のやまぎん県民ホールの3劇場による共同制作「こうもり」で、大津と東京の公演は満席で終了。驚き、ため息、慟哭など、人間のさまざまな鼓動が息づく「おもちゃ箱をひっくり返してみたい」なヨハン・シュトラウス2世の音楽が、現代日本の諸相を映しながら躍動した。」

「狂言回しのフロッシュを演じるのは落語家の桂米團治。そのまま落語家として舞台に現れ、語り、歌い、踊り、芸達者ぶりを炸裂させる。ダジャレに下ネタ、言葉遊びがぼんぼんはじける台本は萬齋自ら手がけた。決して下品にはならない絶妙のあんばいに、狂言という芸術の極意を見る。」

「役者もそろった。日本オペラ界の喜劇王といった感すらある晴雅彦が飛び出すと、笑いの空気が解き放たれる。吉本新喜劇の熟年夫婦を思わせる福井敬と森谷真理のやりとり、藤木大地の華のある道化。幸田浩子のコメディエンヌ根性もどんどん開花する。大西宇宙は持ち前の深い声とコケティッシュな演技のギャップに、何ともいえずおかしみをにじませる。阪哲朗の、役者と観客の感覚の双方を巻き込んで疾走するスピーディな指揮にも「インスピレーションをかきたてられた」。」

◆音楽現代3月号（工藤一郎） 抜粋 山形公演について

「明治初期の日本橋界隈から始まり、第2幕は鹿鳴館、第3幕は牢屋という奇想天外な“読み替え”だが、緻密な工夫とアイデアで逐一納得させられつつ、すっかり楽しまされてしまった。ドイツ語の歌に日本語のせりふ（時々山形弁）という“日本版ジグシュピール”も違和感がなく、落語家・桂米團治のカツペン（活動弁士）風の狂言回しも活躍して、国内トップレベルの歌唱と演技をいやが上にも光り輝かせた。」

「これは、このホールの開館（2020年）以来6つ目のオペラ公演。内、2022年12月からの3演目は「オペラフェスティバル」として括られ、それに先行して催された「オープニングコンサート」では、前記の米團治が司会をしていた。これらの経緯にも促され、観客は知的刺激満載（萬齋？）のステージにも抵抗なく誘いこまれていった。」

◆公演後アンケート・SNSより

- ・オペレッタを今まで見たことのない人に配慮した“お約束”への説明が随所にあって、今までで1番面白いこうもりでした。（大津公演）
- ・大変楽しめました。これからもこのような試みをびわ湖ホールでやっていただきたいです。（大津公演）
- ・非常に楽しく、歌手、指揮、オケ、演出、美術、全てにおいて穴がない公演でした。海外から招聘したキャストやスタッフなしでここまでの完成度であることにいろいろと感慨深いものがありました。（東京公演）
- ・今まで能や狂言といった和にしか興味がなかった人や、一方でクラシック音楽のコンサートにしか足を運んだことがない人でもお互いの共通点を感じながら楽しむことが出来たと思います。（東京公演）
- ・オペラは、大都市でないとなかなか観ることが出来ないが、山形では、積極的に取り組んでいて素晴らしいと思う。（山形公演）
- ・公演が3回で終わりなんてもったいない。もっともっと続けていただきたいと思います。（山形公演）
- ・すべての場面が最高の「絵」でした。ウィーンの皆の衆にみせたい。震撼のオペレッタ。（SNS）
- ・面白い、面白い。日本人のためのこうもりだった。（SNS）
- ・『こうもり』山形公演。実に楽しく人生観が変わった。（SNS）